

学園彙報

☆昭和五十四年度

◎学内研究会

学内の月例研究会は、本年度も実施され、各研究者の発表が次の通りおこなわれた。また、この研究会に対し先きに本学園の灘上恵教同窓会々長が、資金を寄せられて、大いに成果を挙げてほしいとの援助を受けたが、此の程開かれた同窓会全国総会の折りに、更に追加の資金を寄せられ、合計五十万円となった。謹んで感謝の意を表すると共に、研究会一同この厚志に答えるべく、学術研究を一層盛んにして、成果を挙げて行く所存である。

(上田)

○第二十九回——五月九日

本尊勧請様式について

上田 本昌

※宗祖が信仰の対象とされた本尊と、現今の日蓮門下における本尊勧請の各様式について論じた。

○第三十回——六月二十日

御成敗式目について

中里 悠光

※宗祖の法難と深い関係をもった御成敗式目(貞永式目)について、その成立・内容の検討を行った。

○第三十一回——七月六日

法華曼荼羅考序説

里 見 泰 穂

※「本尊論資料」を中心として、「覚禪鈔」(真言宗)の中に出てくる曼荼羅について論を進めた。

○第三十二回——九月七日

言語と思考について

大 森 孝

※言語と本質・現実・生存・経験について論じた。

○第三十三回——十月五日

ヨーロッパ修道院訪問と霊性の交流

町 田 是 正

※西独のザント・オッテリアンを中心に、修道院でキリスト教の研修をして来た報告があった。

○第三十四回——十一月九日

法蔵研究ノート

秋 葉 真 敬

※華嚴五教章の法蔵について、社会史的背景から、法蔵の思想的系譜をさぐった。

○第三十五回——十二月五日

即身成仏論の展開

桑名 貫正

※即身成仏について、受持成仏（身）、唱題成仏（口）、信心成仏（意）の面を考え、六即との関連について論じた。

○第三十六回——昭和五十五年二月五日

中論観因縁品の訳語について

里見 泰穂

※諸法は四縁に因って生ずるとする因果論、「縁起を觀察する章」と言われる同品の訳語、特に「果」に相当する語について論じ、羅什の翻譯上における態度に及んだ。

◎日本仏教学会学術大会

六月二十二日・二十三日の両日にわたり、五十四年度の日本仏教学会学術大会が、愛知学院大学において開催された。加盟の各大学から三十二名の代表研究発表者が二部会に分れて、学術研究の発表を行った。

今回の共通研究課題は、「仏教における修行とその理

論的根拠」であり、本学からの研究発表者は、次の通りであった。

法華経の如説修行と日蓮

中條 暁秀

◎日本印度学仏教学会学術大会

九月十一日・十二日の二日間、立正大学を会場にして、日本印度学仏教学会の第三〇回学術大会が開催された。年を追って盛会となるこの学会も、今回は十三の部会に分れて、研究発表者だけでも四五〇人をこえるという大会となった。

本学からの研究発表者は、次の通りであった。

天台智顛の仏性説

若杉 見竜

身延山久遠寺の本末について

林 是晋

尚、本学出身の有賀要延師が、「細字法華経の諸問題」

(三)（「独」字について）と題して研究発表を行った。

◎日蓮宗教学研究発表大会

第三十二回日蓮宗教学研究発表大会は、身延山短期大学を会場として、十月廿五日・廿六日の両日にわたり、左記の次第および研究発表者と論題により開催された。

十月廿五日

一、開会式

司会 町田 是正

一、開会の辞

里見 泰穂

蓮宗教学研究発表



一、法味言上
 一、挨拶
 一、挨拶
 一、挨拶
 一、研究発表

導師

岩間 湛良
 岩間 湛良
 風間 円静
 宮崎 英修

三祖菩薩号をめぐる
 「本未有善」について
 日蓮聖人の罪意識の一考察
 人類普遍性としての唱題行
 一念三千の探求
 常楽経師門流伝記の考察
 現代宗学への自己批判
 久遠釈尊の因行果徳について
 法界三段と伝法本尊との相関について

早瀬 公人
 若杉 見龍
 西片 元證
 芹沢 一男
 小野 文瑛
 奥野 本洋
 服部 即明
 林 円修
 林 晋

糸久 宝賢
 高橋 俊隆
 倉橋 観隆
 山口 晃一
 沖原 成行
 中村 孝也
 安永 弁哲
 庵谷 行亨

法華玄義の原初型態の一考察
 日蓮聖人遺文引用説話の一考察—安心の側面より—
 十重頭本について—慶林隆師の所説を中心として—

常不輕品の解釈について
 成仏について
 十界構造論—四面の構造—
 法華経における地涌菩薩の戯曲的表現と仏教思想史的
 意義(その二)

身延山と妙伝寺

宗祖と得一

中条 晓 秀

法華經の諸問題―五千起去と提婆達多と多宝仏本地との関係―
矢谷 恵 法

寿量頭本論―五百塵点劫の解釈をめくって―

北川 前 雅

譬喩品偈「蛇蛇」等の読みについて

有賀 要 延

誓願について

町田 是 正

法華經の風土

高橋 堯 昭
渡辺 宝 陽

唱題成仏に関する遺文の説示

十月廿六日

一、研究発

表広蔵日辰の説誦論

井上 博 文

日蓮教学と本覚思想

伊藤 慎 一

楞伽經における訳経史上の一問題点

清水 要 晃

四沙門果説の展開について

三友 健 容

葬式仏教、祈禱仏教

中里 悠 光

北海道身延別院創設について

北村 聡 聡

台湾の仏教における今昔

岡田 栄 照

妙実大覚大僧正の事跡について

中村 文 三

曾我量深著『日蓮論』に対する一考察

小野 兼 弘

吉田松陰と日蓮聖人

石川 康 明

身延山久遠寺身延文庫所蔵の絵画について

坂輪 宣 敬

法華經の世界観

河村 孝 照

身延山における宗祖の本尊勧請様式について

上田 本 昌

一、閉会の辞

宮崎 英 修

◎昭和五十四年度大学卒業論文論題・氏名

1 立正安国論についての一考察

石川 聡

2 元寇と日蓮聖人

江島 健 介

3 不受不施についての一考察

太田 健 治

4 日蓮宗に於ける成仏論

川岸 広 治

5 摂受折伏についての一考察

駒林 利 泰

6 日蓮聖人の戒律観

鈴木 連 生

7 日蓮聖人の報恩―特に父母の恩を中心として―

武川 恭 一

8 日蓮聖人の法然批判の一考察

竹田 一 信

9 心性院日遠上人について

浜 巖 丈

10 日蓮聖人の三秘五綱についての一考察

望月 健 次

11 宗祖の「法華經の行者」観

守本 崇 覚

- 12 宗祖の出家の意義とその歴史的背景について 山田 覚一
- 13 日蓮聖人の守護神観 湯 垣 行 順
- 14 日蓮聖人の身延入山についての一考察 吉 森 善 夫
- 15 日蓮聖人の宗旨について 森 永 憲 章
- 16 日蓮聖人の国家諫暁について 北 川 守

学園だより

◎同窓会全国総会開催

三年に一度の身延山学園同窓会総会が、十一月二十四日（水）、身延山学園で行なわれた。総会に先立ち、午前十時より山梨県支部総会があり、昼食の後、物故者追悼法要が久遠寺の仏殿にて厳修された。引続き二時より、大学大教室において、総会に移った。長谷川寛慶幹事長・上田本昌副幹事長の両名の司会のもとで、先づ松井大周副会長の開会の辞にはじまり、灘上恵教会長の挨拶のあと、本山代表秋山智孝庶務部長と、里見泰穂学頭の挨拶があり、その後、永年勤続教員表彰があった。三十年勤続には、秋山智孝、堀一勇、長谷川寛慶の各師が



又二十年勤続には、望月海淑、大森孝の各師が該当し、それぞれ表彰された。

その後、小崎龍雄座長のもと、議事が進められ、庶務報告（上田幹事）、会計報告（町田幹事）、監査報告、任期満了にともなう役員改選、その他、会則変更等が話し合われた。役員については、灘上会長を始め、再選と決った。又、身延山短大（三年制）を四年制大学に昇格させようという件が前回の総会に引き続き提案され、熱心な議論がつけられた。前向きの姿勢で、

更に推進して行く事になった。

最後に、常任理事の岩田日成師が閉会の辞を述べて総会は終わったが、引続いて里見学頭、林教授の古稀記念お祝いパーティーが別室で開催された。会場には、学校教職員をはじめ、多くの同窓生でうまった。同窓会の池原鍊昌幹事が司会をつとめ、同窓会長灘上師、本山代表秋山師、学校代表長谷川師の祝詞の後、記念品が両先生に、又花束が両先生の夫人にそれぞれ贈られた。和身会々長深沢義雅師の乾杯により祝賀会は盛り上った。又町田教授より、両教授の履歴が紹介され同級生の新川日見師よりエピソード等が披露された。話も尽きなかったが、身延山一老職池上要輝師親会々長の閉会の辞で会は終了した。このあと大善坊において、和身会が開かれ夜がふける迄昔話に花をさかせた。(詳細は「同窓会々報」を参照されたい。)

— ◆
お 願 い ◆
—

◎本誌は「会員制」となっております。本号は記念号につき五千円です。同封の振替用紙をご利用の上、ご送金願います。

◎お知り合いの方々の中で、まだ入会されていない方にはぜひ御入会下さるようお勧め下さい。よろしくご協力の程、お願い申し上げます。